



## 冬の阿蘇を描く

田代順七

Kさんに誘われるまま、大晦日の日から阿蘇写生に出かけることになった。このとしになるまで元日をよそで迎えたことはなかったが、二、三日前から雪が降っているの、向うは見事な雪景色になっていいるだろうとの期待もあつて

正午過ぎタクシーを飛ばして阿蘇へ向つたが立野あたりからは雪の道路で、車はのろろ運転でやっと進んだ。窓外に見えるはずの山々は雲にかくれて姿を見せない。  
調子の悪い時期に行きあわせると、二、三日滞在しても山を見ないで帰ることもある。

宿に着いて案内された部屋は五岳の真正面であるが残念ながら山の三合目から上の方は全く雲の中で見ることが出来ない。頂上のない山の姿はどうにも絵にはならない。胴から下ばかりでは人間だつて絵にはならぬ。部屋は暖房のきいたよいところ、まあゆっくり落ちついて待つ外ない。  
幾十年も春夏秋冬、阿蘇の景色を私は

何百枚か描いたはずである。しかし阿蘇の感じは行くたびに変わっている。気候の変化、時間の違い、光の都合で、いつも見ても新しい気持ちで筆がとれる。形そのものは南郷谷の方からも、阿蘇谷の方からも、外輪山もふくめて、長い間にすっかり暗記してしまっている。それでも見ないではなかなか描く気になれない。と言うのは生きた阿蘇は何度見ても、更に新しい感覚で私の前に展開してくるからだろう。したがってまだ一枚も同じ感じの阿蘇を描いた覚えはないようである。

夕方になって、やっと左手の空の雲がくづれ始めた。灰色の雲間に遠い根子岳の姿が雪をまだらにかぶって見えかくれしている。動く雲と雪の根子岳。そしてたそがれの空の色。それは又新しく私に与えられたモチーフである。用意して持った小さなカンバスに、むきぼるよう描き始めた。しかし夕方の光は早々に暗くなって見えなくなった、半分仕事で、ある根子岳のイメージをしっかりと胸におさめて、道具を片づけることにした。今日は大晦日、続きは来年まわしという訳である。

明くれば元旦。七時に起きていきなり窓の外を眺めたが相変わらず山は見えない。常ならばわが家の型どりのささやかな正月行事がいとなまれるはずである

(画家・東光会々員)



## 国民宿舎

光恒安津子

窓際の、明るいテーブルに、私は席をとった。「雑踏の中の孤独」というか、そんな気持が、そのときの私を支配していた。私はテーブルに、ひとり坐って、カレーライスを一皿注文した。しばらくして、ウェイトレスが無表情な顔をして注文の品を持って来た。

私は十年来、一つの雑誌を編集し、発行している。他人は、私に会うたびごとに、「大変ですナ」とねぎらってくれる。私はそうした言葉に感謝する。そして、過去十年間をふりかえって、その間のいろいろな出来事を思い出してみる。

私は二年ほど前、十二指腸潰瘍にかかった。一年ばかり内科的に治療してみたが、食養生が出来ないままに治らず、とうとう大きらいな手術をうける決心をした。去年の秋、私はその大手術を敢行(?)したおかげで今は元気である。

手術のあと、主治医から、しばらく静養するようにとすすめられるままに、私は、水俣の水天荘という国民宿舎を予約し、そこに十日ばかりをすごした。不知

火海や、遠く九州山脈のむらさきの山なみと共に暮らした。その充足した毎日を、私は今でも懐かしむ。

名医の執刀、その後の静養によって、私は完全に胃病から解放された。

一皿百円のカレーライス。一寸辛さのきすぎたカレーライスを、なんの苦痛もなく、たべられるという幸福を、私はかみしめた。そのとき、ふと私はいやな思い出にひたつた。

あるスポンサーの招待で、豪華な旅館に泊ったときのことである。そこはまことにデラックスで、私の日頃の生活と、あまりにもかかはなれていた。しかし、それはそれでいい。それよりも、もっと私をなやましたのは、そのサービスぶりであった。まさにいたれりつくせりである。

私は日頃の疲れをいやすために、ゆっくり寝たかったが「あのう、朝食は何時に致しましょうか?」と女中さんから問われると、そこは女の身、「十二時に……」とは言えない。やむを得ず「そうね、八時半ごろにしましょうか」と応えてしまった。するとその女中さん、本当に八時半にやってきた。私はうんざりした。約束した手前、起きざるを得ない。ねむたい目をこすりこすり縁側に出た。やがて、朝食を持って来た。それはデ

ラックスと言うべきものであったが、寝不足の私には、美味しくなかった。

私みたいな職業は、一種のサービス業である。いつも他人に気を使わなければならない。だから十二指腸潰瘍にもなったのであろうが、それだけに、少しでも気を使わない時間が欲しいと思う。

国民宿舎、そこは全くサービスに欠けたところである。でも私にとっては、パライスであった。デラックスな旅館、それは豪華で、楽しそうなところであっても、私にとってはやはり、気のつまる所であった。

国民宿舎は、セルフサービスの気構えでゆけば、千円札一枚で一泊され、チップの心配もなく、清潔であるのが何よりうれしい。

手術後十日ほどいたけれど、いやな思いをした事は一度もなかった。あれが、たとえスポンサーつきで、ただであったとしても、デラックスなサービスの行き届いた旅館には、三日もいたら逃げだしたくなつたであらう。

私は水天荘と阿蘇の国民宿舎しか知らないけれども、ひまをみては県内の国民宿舎を、まわってみたいと考えている。

(随筆雑誌編集者)